

蒼茫の彗星

インターネットへの違法アップロード、ネットオークションフリマアプリなどへの出品等、不特定多数に向けた全ての転載・転売行為を禁じます。発見した場合は、1文字につき10円もしくは1ページにつき5,000円の掲載料(使用料)をいただきます。

八、七、六、五、四、三、二、一、

⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
115	103	73	65	55	39	23	5

一、

——この決めごとからは一生逃げることはできないのだと思っていた。

○

毎日同じことの繰り返しだった。

「浄化の儀を執り行いますまつしろみその松白御園が長男、満碧でまおございます」

清めの香がたかれた祓殿で、満碧は畳に手をついて深く頭を下げた。頭につけた花簪がしやらり、と音を立てて揺れる。

下げた頭を再び上げると、満碧の目には怯えたような面持ちの母娘が映る。傷つかない、とは言わないが、もうすっかり慣れきってしまった視線だった。無理もないな、と満碧は自らの容姿を思う。

真珠色の髪に燐葉石の瞳。およそこの国に住まう人間とはかけ離れた容姿は、見る人の心に恐怖、もしくは崇拜といった強い感情を抱かせてしまう。元来の容姿に加えて、儀式を執り行う満碧が身に着けているのは白衣と白袴であり、より人間離れた見た目になってしまう。

(……好きでこの容姿に生まれたわけではないけれど)

そう思いながら、満碧はいつも通りに浄化の儀の手順を進めていった。

帝都の鬼門に居を構える松白家は代々女性が跡継ぎになる神職の家系であり、靈力を有している。その家に生まれた長子である満碧は、通常であればほかの姉妹を手助けする立場にあるはずだった。しかし、生まれた満碧を見て親族一同顔色を変えた、というのだから笑えない。

真珠色の髪に燐葉石の瞳。

この容姿は松白家の中でも強力な“浄めの力”——人間の業や煩惱、ひいては人智を超えた神の怒りや憎しみ、呪いまでも鎮め、浄める力である——を所持している女兒にしか現れないものであり、男児にその姿が現れたのは前例がないという。それがあまりに不審であるとされ、婿養子だった満碧の父は満碧が生まれてすぐに松白家から離縁されている。加えて満碧の下に生まれた三人の妹は、誰一人としてその見た目を持つことはなかった。そして、それを苦にした妹たちの父は自らこの世を去ることを選んだ。今では誰にも顧みられることがなく、いなかったものとして扱われている。

『どうして私たちではなくお兄様なんかに“浄めの力”が宿ったのかしら』

二つ下の妹・トモ子に冷たく言われたのはいつの頃だったかもう定かではない。母・御園が嘆くのを幼い頃から耳にした三人の妹たちが、満碧を蔑むようになるまでそう時間はかからなかった。妹たちも決して弱くはない靈力を持って生まれたはずだが、容

姿に現れるほどではなかった。

要するに彼女たちにとつての満碧の存在は煙たいが、邪険にしすぎては家の利益にならないというものである。

（おれはこの先どうなるんだろう）

この見た目の男の妻になろうという女はきつと現れない。家を継ぐのは二つ下の妹と決まっている。このまま一生この家で飼殺し状態であることはほぼ確定していると言つても過言ではなかった。

浄めの儀を終えた満碧が、儀式用の衣装から普段着に着替えて祓殿を出ると、使用人の一人が満碧を呼びにやつてきた。

「御当主さまがお呼びでございます」

「……母上が？」

「ええ、至急とのことでございます」

至急、という建前で呼びつけられることは日常的にあつた。大抵は新しく祈祷の依頼が入った、というものであるが、今日はなんだかいつもと違う感覚がした。

「失礼いたします。満碧です」

文明開化の世に合わせ、洋風に改装された客間のドア越しに満碧は声をかける。入室の許可が出て室内に入ると、母以外に三人の妹、そしてトモ子の婚約者である正もそ

ろつていた。

（あまりいい話ではないだろうな……）

満碧のこういうときの勘はよく当たる。部屋の入口に一番近い席に腰を下ろすと、満碧は静かに母の言葉を待った。母は室内を見渡すと、おもむろに口を開いた。

「もうじきトモ子が十五になりますから、あたくしがこの家のこれからのことと縁談を決めました。今日はそれをおまえたちに聞いてもらいます」

縁談、という言葉で満碧はぼんやりしたまま聞いた。トモ子の夫になる男は決まっているとなると、さらに下の妹たちの話だろう。

「松白家は代々女が当主を継ぐものです。次の当主はトモ子ですので、正さんはよくよく支えてやってくださいな」

母の言葉に正は首がもげそうな勢いでうなずいた。気の強いトモ子とは対照的に、正はおっとりとしている。正反対な性格の二人だが、上手に付き合っているようだった。

「トモ子と正さんの結婚の日取りも決まりました。次期当主たるトモ子が伴侶を得る前に、満碧、おまえにはこの家を出てもらいます」

続いた言葉に満碧は耳を疑った。まさかここで自分の名が出るとは思ってもみなかった。

「……おれに縁談があるのですか」

訊ね返した満碧に母は重々しくうなずいた。

「ええ、菊名橋家の汀夏様との縁談です。悪い話ではありませんよ」

世間に疎い自覚のある満碧であつても、菊名橋という家の名前は耳にしたことがあつた。代々神祇省（靈的なものを祀り、鎮めるすべての役割を担う官公庁）勤めの家で、現在の当主である菊名橋汀夏は、帝国大学法学部を主席で卒業したエリート中のエリートだと評判だ。

なおこの国では、性別を問わない婚礼は認められているものの、国家の重鎮にもなりうる名家は男女間の婚礼を推奨しているため、なぜ自分に、と満碧はいぶかしんだ。

「あら、大変よいお話ではなくて？ お兄様にはもつたいないですわね」

くすくすと笑うトモ子を正が「トモちゃん、お義兄さん相手にやめなよ」と軽くたしなめたが、その声はあまりにトモ子に甘かつた。トモ子の含みのある笑いが、満碧の中で引つかかつたが、今ここでなにを言つても聞き入れてもらえないことはない。

「松白家としてもおまえの力は貴重ですけどね、先方がどうしても言うものですか。荷物がまとも次第、すぐ向かいなさい」

母がちらりと満碧から視線をそらしたことから察する。おそらく、とんでもない額の金を積まれたのだらうと。そして、今日以降、満碧に祈祷の予定が組まれていなかった理由も理解できてしまった。

（金で売られるのか、おれは）

これでは奴隷も同然だ、と思いながら満碧は母の言葉に「わかりました」と返事をし

た。

○

翌朝、菊名橋家によつて手配された車に揺られて、満碧は帝都の西の郊外にやってきた。菊名橋家の邸宅は、この地に百年近く前から建っている立派な屋敷だった。文明開化の世に合わせて外観は洋風に手直しされているが、重厚な時の流れを背負ってきたことがうかがえる建物だった。

満碧が車から降りると、菊名橋家の使用人と思われる数人が恭しく頭を下げた。名家の使用人だけあり、満碧の奇抜な見た目にも眉一つ動かさないことにホツとする。その中の年嵩の男性がにこやかなまま口を開いた。

「満碧様、ようこそいらつしやいました。わたくしは侍従長の恩加島と申します。こちらには満碧様の世話役をつとめます藤世でございます。どうぞよろしくお願いいたします」

恩加島と名乗った侍従長が紹介したのは、色白のふくよかな女性だった。名にも入っている淡い藤色の着物がよく似合っている。

「藤世でございます。なんなりとお申し付けくださいましね」
にこり、と藤世が笑うと頬が丸く持ち上がった。布袋尊を女性にしたような彼女に、

満碧の心は幾分か落ち着いた。

「さて、さつそく旦那様とお顔合わせ、といきたいところですが、先ほど急な用務でお出かけになられてしましまして……旦那様がお戻りになりましたら改めて場を整えますので、ひとまずお部屋にどうぞ」

「あの、旦那様のお戻り、というのはいつ頃でしょうか」

やっと口を開けた満碧が問いかけると、恩加島は眉を下げた。

「申し訳ございません。わたくしどもも、旦那様の公務については多くをお知らせいただけない立場なのです」

「そうですか……」

噂のエリートである汀夏との対面が先に延び、心の準備ができるようになって喜ぶべきか、緊張する時間が延びたことを嘆くべきか、と満碧は複雑な気持ちになる。そんな満碧の心境を見透かしてか、藤世が言う。

「そんなお顔をなさらないでくださいな。旦那様は良い方ですからね。ゆつくりおくつろぎになつて、お待ちくださいませ」

「はい。ありがとうございます」

藤世に言われると不安がふつと消える。温かく柔らかな物言いをする彼女が身の回りの世話をしてくれるというのであれば、きっと大丈夫だろうと思えた。

案内された部屋は畳敷きの十畳一間が二つ連なっている部屋だった。真ん中の襖を閉めると独立した部屋として使える。

部屋に敷かれた畳からは新しい草の香りがした。調度品は落ち着いた色合いで整えられており、初めての場所なのに親しみが感じられた。

「こちらでございます。お荷物はお手持ち以外にもございますか？」

「いえ……その、あまり、ものを多く持つ身ではございませんので」

事実だが、それを藤世はいいように受け取ったらしく「神職でおつとめされる方は節制なさるそうですものね」とつぶやいた。着るものにはある程度自由があったが、神事に従事している時間の方が長く、私服をあまり多く持つても仕方がなかった、というのが真相である。

「この家も広うございますから、迷われないよう最初のうちはなにか御用がありましたら、わたくしにお申し付けくださいまし。わたくしは隣の部屋におりますので」

藤世はそう言つて、にこりと笑うと満碧の荷物を部屋に置いて出て行つた。慣れない環境で他人と一緒にいることが満碧の負担になると見ての配慮だろうが、行き届いていると感心した。

藤世が去つた部屋はしんと静かだった。満碧は荷解きをする気にもなれず、部屋に用意されていた座布団を枕にして寝ころんだ。寝ころぶと緊張の糸が切れたのか、猛烈な眠気に襲われる。うとうとしながら満碧はふと昨日の夜のことを思い出す。

昨日は、突然の話にうまく寝つけず、落ち着くために水を飲むうとして、厨に向かった。そのときに母の部屋の前を通りかかると、部屋の中から話し声が聞こえることに気づいた。

『お母様も意地が悪いわ。菊名橋家のお話を全部お兄様にして差し上げないんだもの』母を咎める、というよりは楽しんでるようなトモ子の物言いに満碧はぎゅつとくちびるをかみしめた。ともすれば叫び出してしまいうような衝動を抑える。この家での飼殺しを避ける唯一の機会を無駄にしてはいけない、と必死に自分を律しながら、満碧は会話の続きを待った。

母は氣だるげにため息をつく、しゃべり始めた。酒が入っているのか、やや舌足らずなしゃべり方だった。

『しても仕方がないでしょう。菊名橋家の男性は代々続く呪いのせいで、三十過ぎまでしか生きられないなんて話。もう決まった縁談ですからお断りなんてもつてのほかです』

『それにしてもそんなにお兄様の力を求めるなんて、あちらもよほど切羽詰まっていらっしゃるのね』

トモ子の形ばかりの憐憫の言葉に、母はやはり氣だるそうに返した。

『跡継ぎがないそうですからね。少しでも呪いから遠ざけようと必死になるのも、うなずけますけれど、無駄でしょう』

その後の話は満碧の頭にろくに入ってこなかった。この話が真実であるとするならば、満碧が遠くないうちに菊名橋家から追い出されるのは確定であり、そのとき彼女たちは満碧の戻りを許さないのだろう。目の前が真っ暗になり、足元にぽっかりと穴が空いたような感覚を覚える。

(……こんな話、聞くんじゃ、なかった)

その後どうやって部屋まで戻ったのか、満碧はよく覚えていない。そのまま布団の中でずっと小さく丸くなつたまま、まんじりともせず朝を迎えた。

その寝不足のつけが今になってきた。

(このまま、寝ては、服が……)

しわになる、と思いながらも満碧は眠氣にあらがえず、いつしか両目を閉じていた。

次に満碧が目を覚ますと、見慣れない天井があつた。新調された畳特有のい草の香りが満ちている部屋に、一瞬ここはどこだろう、と考える。

(菊名橋家のお屋敷だ……)

いつの間にか眠っていたのだと思い出して、満碧は目をこすりながら身を起こす。

「満碧様、いらっしゃいますか？」

部屋の外から藤世の声がかかる。満碧は問いかけに是と答えて、彼女を部屋に招き入れた。仕事をしていたのだろう彼女はたすきをかけていた。藤世は満碧の様子を見て、